

# 税理士の ひとりごと

No. 142

## 不治の貧乏性

税理士 齋藤明

今からかれこれ9年前、たまたま祇園で食事をしている時に隣にいたロシア人に「京都ではどこが印象に残った？」と聞いてみたところ、「龍安寺が最高だった」と言うので、翌日予定がフリーだった私は龍安寺に行ってみることにしました。

龍安寺といえば、石が不規則に配置された石庭が有名で、その石庭を臨む縁側に様々な国からやってきた外国人観光客がズラッと一列に陣取り、「ウーン！ ニホンノブンカ、スバラシイデスネ」とばかりに長時間ジッと石庭を眺めているのです。しかし、正直私にはその石庭がそれほど心に響く造形であるとは感じられず、そそくさとそこを離れ、出口へ向かうべく順路に従い寺の裏手へと向かったのですが、思いがけずその裏庭にあった蹲踞（つくばい）の前で私はフリーズしてしまいました。

水戸光圀公が寺に寄進したというそ

の蹲踞には、真ん中の四角形の空洞を「口」という漢字に見立てて、「吾唯足知」という文字が刻まれています。「吾唯足知」というのは、お釈迦様の遺言のお経に書かれた言葉で、「足るを知らざるものは富めりといえども貧し、足るを知るものは貧しといえども富めり」という意味で、もっと多くのお金を稼ぐことと、税金をいかに少なくするのかみたいなことばかり言っている税理士業界とその周辺に少々辟易していた私にとって、それは妙に心に刺さる一言だったのです。

そんな私も、薄給の会計事務所職員時代には「お金を稼いだら、ポルシェを買って、海外旅行はビジネスクラスで行って、焼肉は叙々苑で特上コースを思い切り食べてやるう」なんてことを本気で考えていたのです。それなのに、ある程度稼げるようになって実際にポルシェを買いえるようになってみると、「ポルシェじゃサーフィンにも行け